

UJNR水産増養殖専門部会第 39 回日米合同会議 事務会議

議事録

第39回のUJNR水産増養殖専門部会日米合同会議は、2010年10月25日から30日まで、鹿児島県鹿児島市、指宿市、垂水市、志布志市、宮崎県串間市で開催された。事務会議は鹿児島大学稲盛会館で10月25日に、科学シンポジウムも同会場で10月25～26日に開催された。また、現地検討会は鹿児島市の鹿児島大学水産学部並びに有村屋本社工場、指宿市の鹿児島県水産技術開発センター、垂水市の垂水市漁業協同組合、志布志市の(株)鹿児島鰻普現堂事業所、志布志栽培漁業センター、さらに宮崎県串間市(株)黒瀬水産において10月27～29日に実施された。科学シンポジウムは鹿児島大学が共催して行われ、テーマは「養殖産業の現在と将来」であった。また、29日には志布志市内で、サテライトシンポジウム「種苗生産の現状と解決すべき課題」も開催された。

日米部会長による挨拶

開会が宣言された後、日本国側を代表して飯田 貴次部会長が挨拶に立ち、米国側部会参加者に対する歓迎の言葉と米国側マイケル・ラスト新部会長、ポウル・オーリン副部会長就任のお祝いを述べた。さらに、ロバート・イワモト前部会長への感謝の意と引き続く UJNR への助力を依頼する言葉を述べた。彼はまた、養殖業の重要性や生物多様性条約締約国第10回会議(COP10)を例に環境に配慮した養殖業のための研究の必要性、水産総合研究センターにおける養殖研究の重要性に触れ、第8次3カ年計画初年度の科学シンポジウムの意義や現地検討会の内容にも触れた挨拶を行った。最後に彼は、これまで日本側事務局長などを務め、UJNR 水産増養殖専門部会の発展に大きく貢献した福所邦彦氏が去る9月23日に逝去したことを悲しみを持って報告した。

マイケル・ラスト新部会長から、米国側部会参加者を代表して福所邦彦氏逝去に対する心からのお悔やみの言葉が述べられるとともに、今回の会議開催の労に対する日本側部会への感謝の言葉が述べられた。ラスト部会長はまた、最近の世界経済の厳しい状態の時に、この部会の長い継続性がある意味日米二国間の安定的な関係を維持するために重要であると述べ、特にこれからの養殖業にとって、生産的でより順調な時代を築く手助けになるであろうと、この共同を継続することの重要性を強調した。彼は、南九州を訪れることの喜びやシンポジウムと現地検討会への期待を述べるとともに、シンポジウム話題提供者に、発表では主要な焦点を強調すること、興味を持ってくれた参加者との詳細な討論は次の機会に行うよう提案したことを紹介し

た。さらに彼は、養殖業における技術革新の重要性、特にエネルギーの使用を少なくし、環境への影響を低減し、それでも高い質と収益性が維持できる海産食品の生産のための技術革新の重要性を述べた。加えて、来る第40回のテーマである種苗生産技術への重要な導きとなる今回のサテライトシンポジウムや現地検討会の意義を強調し、最後に、米国における養殖分野の発展方向を考える上でも、期待の大きな会議であると述べた。

参加者の紹介と議事確認

米国側、日本国側の順で、事務会議参加者の自己紹介が行われた。飯田部会長から議事進行及びシンポジウム日程の了承が求められ、全員がそれに同意した。

科学交流と文献交換

日本側部会の渋野拓郎事務局員が、この1年間日本側提案の3件の共同研究と2件の長期在外研究が実施されたことを報告し、その中で実施されているアワビ類の個体群生育能力に関する課題は、昨年度の後継課題であることが紹介された。渋野事務局員はまた、昨年10月以降、シンポジウムあるいはワークショップなどに参加するため、延べ30名の科学者が米国に赴いたことを指摘した。米国側部会のオーリン副部会長は、渋野事務局員の報告に付け加える共同は把握していないと報告し、米国側共同研究者は終了した共同研究に大変満足している旨を追加した。

これに追加して、渋野事務局員から、日本の公設機関の年次技術報告最新版の目次一覧が米国側に手渡された。

プロシーディング集の進捗状況

山崎 誠事務局長補佐から第37回 UJNR 科学シンポジウムのプロシーディングスが表示され、部会委員に刷り上がり冊子が配付されるとともに、米国側担当者による英文校閲へのお礼が述べられた。また、来月中には米国の各研究機関にも配付される予定であるとの報告があった。付け加えて、彼はラスト部会長の求めに応じ、第35回の UJNR 科学シンポジウムのプロシーディングスは養殖研究所のホームページからダウンロードできることを報告した。

ラスト部会長からは第38回 UJNR 科学シンポジウムのプロシーディングスは編集途中で、12月には山崎事務局長補佐に送付する旨が報告された。

前回からの懸案事項

編集責任者のコンラッド・マンケン元部会長の代理として、イワモト前部会長から、第40回合同会議に向かって作成されている UJNR の成果に関する歴史書の作成状況が報告され、6か月以内に完成できるとの報告が行われた。

新たな事務案件

山崎事務局長補佐から、新規検討事項の提案の有無が問われたが、誰からも提案はなかった。

第40回UJNR会議開催案

サリバン名誉部会員から、第40回の日米合同会議をハワイで、2011年秋に開催する予定である旨案内が行われた。これを受け、飯田部会長は米国側部会に対し、その計画に対する謝意を表するとともに、来年第40回合同会議の意義を強調した。

第39回 UJNR 科学シンポジウム及び現地検討会の予定

山崎事務局長補佐が、科学シンポジウムとサテライトシンポジウムの特徴を報告した。

続いて、奥澤公一事務局員が、現地検討会の旅程の説明を行った。

謝辞

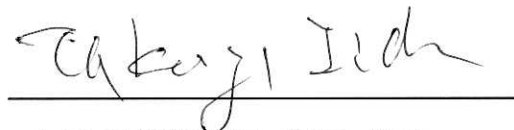
飯田部会長は、この会議に参加した部会員とオブザーバーに対し謝意を表した。また、通訳として両国の意思疎通に尽力した山崎美智子女史に謝意を表した。

閉会

すべての協議が終了し、第39回UJNR水産増養殖専門部会日米合同会議事務会議は閉会した。この議事録は2010年10月29日に宮崎市内において署名された。



米国側部会長 マイケル・ラスト



日本国側部会長 飯田 貴次